

令和 6 年 4 月 9 日現在

機関番号：37704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02720

研究課題名(和文) 発達障害の補償要因の強化を図るための児童虐待防止の支援策の策定

研究課題名(英文) Formulation of support measures to prevent child abuse to strengthen compensation factors for developmental disabilities

研究代表者

前原 宏美 (Maehara, Hiromi)

鹿児島純心大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号：20737895

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は発達障害の補償要因の強化を図るための児童虐待防止支援策の策定を目的とした。定型発達の子どもの同じ環境で生活するための最低限の配慮、母親の障害の気づきを保健福祉医療におけるインフォーマルな支援を含めた支援の選択肢の拡大、関連機関の連携のもと生涯を通じた包括的段階的支援の実現、発達障害の啓発、家族間の環境調整、地域のネットワークの構築、母親が自分自身の人生を尊重する価値観と子育てに対するゆるぎない信念を助長する支援に加え、将来の複雑な人間関係の中での社会的孤立、親亡き後の身辺自立や経済的自立、親以外の家族の介護負担の増加など孤立無援感に纏わる不安や葛藤に対する支援が虐待防止策の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は発達障害が虐待のリスク要因であるという線形思考を払拭し、補償要因(強み)が十分なら虐待を防止できるという発展性が期待できる。発達障害と虐待の関係性を発達障害に対する理解と受容に問題があり、結果として虐待的対応に傾斜していくものと位置づけ、発達障害の補償要因に視点を置いた支援策として、虐待特性に配慮した構造化された環境を重点的に整え、虐待的な養育がおこなわれてきたことで子どもに発達障害に類似・酷似した状態像が生じ、その結果さらなる虐待状況へと悪循環に至っていく発達障害、保護者自身に発達障害的な特性があるために親子関係の構築に困難が生じているとされる発達障害にも対応した支援策になり得る。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to formulate child abuse prevention support measures to strengthen compensatory factors for developmental disorders.

Minimum consideration for living in the same environment, expansion of support including informal support in health, welfare and medical care for awareness of disabilities, realization of comprehensive step-by-step support in cooperation with related organizations, awareness of developmental disabilities, adjusting the environment between families, building a local network, supporting the mother's values that respect her life and a firm belief in child-rearing, as well as future social isolation, self-reliance and financial independence after the death of a parent, and support for those other than the parent. This is support for the anxiety and conflicts associated with feelings of isolation and helplessness, such as the increased burden of caregiving on family members.

研究分野：子ども学および保育学関連

キーワード：発達障害 児童虐待 補償要因 リスク要因

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

子どもの障害は、親の虐待行為を誘発するリスク要因のひとつであり、特に発達障害は、他の障害と比較して虐待のリスクが高い¹⁾。発達障害は、一見しただけでは発達障害であるという判断がつかないが、対人関係や特定の行動、行為に困難をもつため、発達障害の子どもをもつ親は、葛藤や不安、自責感や罪障感などの否定的感情を生みやすい。発達障害の子どもは、周囲と異なるコミュニケーションモードをもつため、日常生活そのものが恐怖や不安と隣り合わせであり、失敗や葛藤が起こりやすい。プライマリーケアラーである親は、コミュニケーションモードの違いによって発達障害の子どもとの相互行為に難しさやかかわりの不適合さを経験することにより虐待のリスク要因を顕在化させていく。しかし、発達障害と虐待は直接の因果関係や関連が証明されているわけではなく、障害の子どもの多くは虐待されていない^{2,3)}。本研究の問いは、発達障害の子どもをもつ親が必ずしも虐待を顕在化させない事実であり、「なにが虐待を防いでいるのか」という発達障害の補償要因の存在である。

虐待へのアプローチは、「虐待問題が起こってから」から「虐待問題が起こる前に」へと時間軸を移すこと、「なにが虐待問題を引き起こしたのか」というリスク要因より「なにが虐待問題を未然に防ぐのか」という補償因子を強化することが重要である。発達障害が虐待のリスク要因として過剰に注目され、「スティグマ」として機能することを避けるためにも本質的な要因を詳細に検討することが必要である。発達障害の子どもが障害ゆえに虐待の犠牲者にならないように、発達障害という障害をもつ弱者である子どもを救うという最大の目的を達成することへの貢献を目指す。

2. 研究の目的

本研究は、児童虐待のリスク要因のひとつとされる発達障害のリスク要因を中和する補償因子を特定し、補償因子を強化するためにはどのような支援を必要とするのかを明らかにし、具体的な虐待の支援策を検討することを目的とする。本研究では、当事者である発達障害の子どもをもつ親にアクセスし、リスク要因と補償要因を特定する。本研究は、発達障害の子どもが障害ゆえに虐待の犠牲者にならないように、発達障害という障害をもつ弱者である子どもを救うという最大の目的を達成することへの貢献を目指す。

3. 研究の方法

本研究は、「発達障害と虐待の実態調査」を実施したうえで、「発達障害のリスク要因と補償要因の特定」を行い、「発達障害と虐待の具体的な支援策の考案」を行う。

1) 発達障害と虐待の実態把握 (2020 年度)

(1) 児童養護施設および児童心理治療施設に入所している虐待を受けた子どもの実態調査

児童養護施設および児童心理治療施設における調査内容

- ・ 障害の子どもが入所している割合、障害の種類、虐待の種類、性別など
- ・ 発達障害の子どもの行動特性、情緒面、感情面の特性など
- ・ 発達障害の子どもに対する情緒面、感情的支援の実際、支援の課題など

2) 発達障害のリスク要因と補償要因の把握 (2021 ~ 2022 年度)

(1) 発達障害の子どもの親が活動の場における実地調査

発達障害の子どもの親が活動しているサークル活動、自助グループ、各種団体が主催する企画などにおいて活動状況の実地調査を行う。

(2) 発達障害の子どもの親へのインタビュー調査

発達障害の子どもの親が活動している場でのフィールドワークを通して、インタビュー調査の依頼を行い、調査に協力、同意を得られた対象に対してインタビュー調査を行う。

発達障害の子どもの親へのインタビュー調査内容

- ・ 発達障害の診断告知前に体験した相互作用の難しさ、かかわりの不適合さ、葛藤、不安、自責感、罪障感、疲労感など
- ・ 発達障害の診断告知後に体験した否定的感情の変化
- ・ 発達障害の子どもと生活する上での相談、支援体制など

3) 発達障害と虐待防止の支援策の考案 (2023 年度)

「発達障害と虐待の実態把握」と「発達障害のリスク要因と補償要因の把握」で得たデータを基に発達障害のリスク要因と補償要因を特定する。補償要因を強化するために発達障害の特性に配慮した構造化された環境と整えることに視点を置き、支援策を考案する。

4. 研究成果

1) 発達障害と虐待の実態把握 (2020 年度)

児童養護施設および児童心理治療施設に入所している虐待を受けた子どもの実態調査を実施した。実態調査は、障害の子どもが入所している割合、障害の種別、虐待の種類、性別など、発達障害の子どもへの行動特性、情緒面、感情面の特性など、発達障害の子どもに対する情緒面、感情的支援の実態、支援の課題などの内容とした。入所している子どもは依然として虐待実態が多いこと、発達障害特性の子どもへの入所が増加傾向にあることが把握できた。発達障害特性の子どもに対して、障害特性の理解と、子どもの個々の行動特性、情緒面、感情面の特性に応じた支援が必要であり、コミュニケーションの問題を含め、対人関係における介入が課題であることが把握できた。

2) 発達障害のリスク要因と補償要因の把握 (2021 ~ 2022 年度)

(1) 発達障害の子どもへの親が活動の場における実地調査

発達障害の子どもへの親が活動しているサークル活動、自助グループ、各種団体が主催する企画などにおける活動状況では、コロナ禍で活動が縮小しているものの、オンラインでの活動も活発に行われていた。発達障害というおなじ障害の子どもをもつ親同士のネットワークは、貴重な情報共有の場となり、発達障害支援の選択肢の拡大を図ること、親のストレス発散のコミュニティとしての効果が把握できた。発達障害の子どもをもちながら、障害受容ができておらず、発達障害の関わる支援や親同士のネットワークの繋がりができていない親の問題が重要な課題であることが把握できた。

(2) 発達障害の子どもへの親へのインタビュー調査

発達障害の子どもへの親へのインタビュー調査では、発達障害の診断告知前に体験した相互作用の難しさ、かかわりの不適応さ、葛藤、不安、自責感、罪障感、疲労感など、発達障害の診断告知後に体験した否定的感情の変化、発達障害の子どもと生活する上での相談、支援体制などの内容でインタビューを実施した。発達障害をもつ子どもの親は、子どもを愛おしく想う気持ちを持ち、発達障害という障害を特別なものとしてではなく、ひとりの子どもとして育てていることが真髓であることが把握できた。そして、子どもの障害を受容するまでの葛藤を経験しながら受容過程のプロセスを経て、積極的な支援の選択肢の拡大を図るための行動化、積極的な発達障害をもつ子どもであることを情報開示することにより発達障害の子どもへの理解と対応の協力要請を行うなど、発達障害をもつ子どもが安心して過ごせる環境を整えるための行動化を図っていた。発達障害者支援法の施行により、保健医療福祉における支援が充実し、支援に対する満足感を得ているものの、生涯を通じた包括的で継続的、段階的な支援を必要としていることが把握できた。子どもの成長と親の高齢化に伴い家族機能の変化が生じるため、18歳以降の支援の整備の必要性、支援者による障害者に対する虐待の問題などを視野にいれた支援体制の整備が重要な課題であることがみえてきた。

3) 発達障害と虐待防止のための支援策の考案

発達障害をもつ子どもの母親のインタビュー調査の内容を分析し、虐待防止を見据えた発達障害の支援策を検討した。

(1) 分析方法

親の補償要因(強み)の特定と補償要因を促す支援を検討するために、SCAT分析を実施した。

(2) 結果

SCAT分析の結果、親の補償要因(強み)として、8つの理論記述が抽出された。<>は、構成概念を示す。

<発達障害の子どもへの親の子育て観>は、子育てを特別なことと捉えるものでもなく、必ずしも<発達障害の子どもへのきょうだいのカイン・コンプレックスの問題>に発展するわけではない。

発達障害の子どもへの親は、妊娠中の体調や出産後の子どもの発達課程で<発達障害という障害の気づき>が<発達障害という障害の受容過程>の始まりとなり、<能動的な受診行動>により<発達障害の確定診断>と<発達障害の診断告知>に至る。

発達障害の子どもへの親の積極的な<発達障害という障害特性>と<発達障害という障害の個別性>に関する情報開示は、発達障害の子どもに関わる人々の理解と対応につながり、<発達障害の子どもへの安心できる居場所>をつくる。

<発達障害の子どもへの親の就業による問題>は、発達障害の子どもへの支援の相談や申請手続きなどの支障となるもインフォーマルな支援を活用し、<発達障害の子どもへの支援の選択肢の拡大>を図ることができる。

<発達障害の子どもへの親の人生を尊重する価値観>と<(発達障害の子どもへの親の)子育てに対するゆるぎない信念>は、周囲の意見に左右されない子育てを貫くことができる。

発達障害の子どもへの親の子育てに関する不安や心配事は、<発達障害の子どもへの親の子育てにおける家族間の理解>によって解決を図る。

<発達障害の子どもへの母親同士ネットワーク>は、<発達障害の支援の情報共有の場>となり、<発達障害の子どもへの支援の選択肢の拡大>と<発達障害の子どもへの母親のストレス発散のコミュニティ>となる。

将来の<発達障害の子どもへの孤立無援の問題>と<(発達障害の子どもへの)きょうだいの介

護負担の問題>に対して、生涯に渡る<発達障害の支援に関わる関連機関の連携>による<発達障害の包括的段階的継続的支援>が必要である。

(3) 考察

発達障害の子どもの虐待防止を見据えた親の補償要因(強み)を促すための支援について考察した。

発達障害の子どもの子育てを特別なことと捉えていない<(発達障害の子どもの親の)子育て観>は、心理的な問題を抱えた支援を必要^{4,8)}とする弱い存在としての親を一面的に描き出す危険性を払拭するものである。発達障害の子どもの親の子育てのストレスとその背景要因に対する支援は、二次障害への移行を防ぐためにも喫緊の課題であるのは間違いない。しかしながら、発達障害の子どもの親は、決して特別な配慮ではなく、定型発達の子どものと同じ環境で生活するための最低限の配慮を求めている。

発達障害の子どもの親の多くは、専門家から障害を指摘される前に子どもの発達や行動特性について何らかの不安や違和感に気づきながら、支援の必要性の認識に乏しい⁹⁾との指摘がある。発達障害の子どもの親の発達障害の特性の気づきと早期の受診は、子どもへの対応を試行錯誤する時間を保障し、家族間の凝集性やソーシャルサポートなどの社会的要因と親の障害受容を促進¹⁰⁾する。発達障害の子どもの親の補償要因(強み)を強化するためには<発達障害という障害の気づき>を確実に拾い上げていく保健福祉医療における<発達障害の子どもの支援に関わる関連機関の連携>が重要である。

発達障害の子どもの特性であるコミュニケーションや対人関係の問題は、子ども同士のトラブルの原因となりやすく、親の育て方の問題^{11,12)}として指摘されることが多い。親の積極的な情報開示を、支援者サイドは、<発達障害という障害特性>をひとつの枠組みで判断せず、<発達障害という障害の個性>を考慮し、子どもの感情が揺さぶられることなく<安心した居場所>として認識できる対応に活かしていくことが重要である。

発達障害の子どもの親が、自分の人生のなかのひとつの選択肢である就業を躊躇なく継続するためには、発達障害の支援に関わる相談や手続き等の問題を解決していくことが課題である。

発達障害の子どもの母親の子どもとともに歩む人生の長い時間軸には、苦悩や困難等のネガティブな心情だけではなく、喜びや幸せ、感謝等のポジティブな心情も存在する¹³⁾。発達障害の子どもの親は、障害の有無にかかわらず、わが子を唯一無二の存在として子育てをし、子どもに自分の人生を歩んでほしいと願っている¹³⁾。だからこそ親が、ひとりのひととして、どのような出会いのなかで生活を送ってきたのかを捉えること、そこに自分自身の人生の価値をおくことができるような支援が重要である。

発達障害の子どもの家族において夫婦間の性役割規範¹⁴⁾は、子どもの障害ゆえに強調されることが示されている。家族の形態が多様化している現在も、親の家族に対する様々なニーズが存在するなか、<発達障害の子どもの子育てにおける家族間の理解>を図り、家族間で調整しあえる環境¹⁴⁾を構築しできるように、家族を肯定的に捉えて心理的・情緒的な支えとなるような関係性の構築が重要である。

発達障害の子どもの親の仲間との繋がりは、心理的支援や情報提供の確保、幅広い対処行動^{15,16)}への可能性が示されている。<(発達障害の子どもの)親同士のネットワーク>を<発達障害の支援の情報共有の場>、<発達障害の子どもの親のストレス発散のコミュニティ>として機能できることは、<発達障害の子どもの支援の選択肢の拡大>によって未来を拓く可能性を示唆している。<発達障害の子どもの親のストレス発散のコミュニティ>は、二次障害や児童虐待問題に対応できるストレスマネジメントとしての機能が大きい。発達障害の子どもの親が、負担なく足が運べるように、身近に存在する地域社会でのネットワークを構築していくことが重要である。

発達障害の子どもの親亡き後の基本的な生活基盤の生涯補償の不安^{17,18)}による<発達障害の子どもの孤立無援の問題>と<(発達障害の子どもの)きょうだいの介護負担の問題>は大きい。ここには、子どもの成長と親の高齢化に伴い、発達障害の子どもの親の虐待問題ではなく、親の手から子どもが離れることによる新たな虐待問題が存在する。発達障害の子どもの母親がわが子と自分自身の将来像を肯定的に描けるように、保健福祉医療における<発達障害の支援に関わる関連機関の連携>によって<発達障害の包括的段階的継続的支援>を現実的に活用できる体制づくりが重要である。

<引用文献>

- 1) 細川徹, 本間博彰. わが国における児童虐待の実態とその特徴. 平成 13 年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書. 2002; 382-390.
- 2) 田中康雄. 発達障害と児童虐待(maltreatment). 臨床精神医学. 2003; 3(2): 153-159.
- 3) 田中康雄. 発達障害と児童虐待(maltreatment). 子どもの虐待とネグレクト. 2005; 7(3): 304-312.

- 4) 安田すみ江, 後藤麻美, 加村 梓. 発達障害を持つ児の保護者の育児上の困難さに関する調査. 小児保健研究. **2012**; **71** (4): **495-500**.
- 5) 松岡純子, 玉木敦子, 初田真人, 西池絵衣子. 広汎性発達障害児を持つ母親が体験している困難と心理的支援. 日本看護科学会誌. **2013**; **33**: **12-20**.
- 6) 永田雅子, 佐野さやか. 自閉症スペクトラム障害が疑われる2歳児の母親の精神的健康と育児ストレスの検討. 小児の精神と神経. **2013**; **53** (3): **203-209**.
- 7) 伊藤由香, 小林恵子. 子どもの発達障害の特性を指摘された母親の子育てにおける体験—発達障害の特性を指摘されてから専門機関の継続的な支援を受けるまで—. 日本地域看護学会誌. **2018**; **21**: **22-30**.
- 8) 道原里奈, 岩元澄子. 発達障害児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究 - 子どもと母親の属性とソーシャルサポートに着目して -. 久留米大学心理学研究. **2012**; **11**: **74-83**.
- 9) 東谷敏子, 林隆, 木戸久美子. 発達障害児を持つ保護者のわが子の発達に対する認識についての検討. 小児保健研究. **2010**; **69** (1): **38-46**.
- 10) 田中富子. 保護者の障害受容に影響を与える要因—社会的支援を視点とした分析—. 吉備国際大学研究紀要 (医療・自然科学系). **2014**; **24**: **43-54**.
- 11) 松下真由美. 軽度発達障害児をもつ母親の障害受容過程についての研究. 応用社会学研究東京国際大学大学院社会学研究科. **2003**; **13**: **27-52**.
- 12) 伊奈登美子, 佐藤勝利. 軽度発達障害児をもつ母親障害受容過程と学校における心理的支援—6事例の調査および半構造化面接の分析を通して—. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要. **2007**; **10**: **7-14**.
- 13) 辻あゆみ, いとうたけひこ. 発達障害児者の母親の語りからみる本人の人生: 元園長との振り返り面接記録のテキストマイニングと質的内容分析. 心理科学. **2023**; **44** (1): **29-48**.
- 14) 大久保麻矢. 発達障害児の父親の文献検討—父親を取り巻く環境に焦点を当てて—. 和洋女子大学紀要. **2023**; **64**: **207-213**.
- 15) 武藤葉子, 池田友美, 圓尾奈津美, 郷間英世. 軽度発達障害をもつ子の母親の「わが子の障害」のとらえ方—子育てについての「語り」を通して—. 教育実践総合センター研究紀要. **2008**; **17**: **59-66**.
- 16) 岩崎久志, 海蔵寺陽子. (2009) 軽度発達障害児をもつ母親への支援. 流通科学大学論集. **2009**; **22** (1): **43-53**.
- 17) 傳力. 自閉症者の親亡き後の生活に対する親の不安 に関する研究. 生活科学研究誌. **2009**; **7**: **181-190**.
- 18) 辰巳鉄次郎. 親なき後の備えについて—千葉県自閉症協会で実施したアンケート調査の結果より. かがやき. **2013**; **9**: **13-16**.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 前原宏美	4. 巻 10
2. 論文標題 発達障害の子どもの母親の「ふつう」という言葉にみる支援のあり方	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 88-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前原宏美	4. 巻 1
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症の感染拡大下における発達障害の子どもへの支援を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 90-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前原宏美	4. 巻 42(1)
2. 論文標題 発達障害の子どもの母親の子育ての強みを促す支援	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 思春期学	6. 最初と最後の頁 116-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 前原宏美
2. 発表標題 発達障害者の就労支援に関する文献的検討
3. 学会等名 日本看護研究学会第49回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前原宏美
2. 発表標題 発達障害のある看護学生の教育的支援に関する文献的検討
3. 学会等名 日本看護学教育学会第32回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前原宏美
2. 発表標題 発達障害の子どもの母親の子育ての強みを促す支援
3. 学会等名 第42回思春期学会総会・学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前原宏美
2. 発表標題 発達障害の子どもをもつ親の心理的ストレスに対する支援の実践に関する文献的検討
3. 学会等名 第18回医療の質・安全学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前原宏美
2. 発表標題 発達障害児の虐待問題に対する支援についての研究概観
3. 学会等名 第41回日本思春期学会総会・学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山田 美幸 (Yamada Miyuki) (00336314)	鹿児島純心大学・看護栄養学部・准教授 (37704)	
研究 分担者	浅野 倫子 (Asano Rinko) (70867332)	鹿児島純心大学・看護栄養学部・講師 (37704)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------